山口県教育会現職研修助成事業

自ら考え、学び続ける子どもの育成　～ICT を活用した授業づくりを通して～

下松市立豊井小学校

1　主題設定の理由

（1）　今日的な課題から

国際化の進展、グローバル化、情報の氾濫、個人の価値観の変化や多様化など、社会の急激な変化を背景に、子どもたちの学習意欲や自分への自信の欠如などの課題が見られる中、学校教育においては、課題を見出し解決する力や知識・技術を更新し生涯にわたって学ぶ意欲など、変化に対応するための能力を育むことが求められている。

また、学習指導要領では、基礎的・基本的な知識・技能の習得を基盤とした思考力・判断力・表現力の育成と学習意欲や生活習慣の確立が求められている。そのため、課題解決能力、情報処理能力、コミュニケーション能力などを身につけることがこれからの学校教育推進にあたっての重要課題である。

（2）　児童の実態から

本校は、全校児童４８名の小規模校であり、複式学級が２学級ある。児童は素直で明るく、他の学年とも仲が良い。複式指導においては、児童中心に学習を進めるリーダー学習を進めている。しかし、人数の多い複式学級であり、学力は二極化し個別に支援や配慮の必要な児童が高い割合で見られる。そのため本校の実態に合う少人数・複式の授業づくりに取り組む必要がある。

本校では、児童がリーダーを中心として自分たちで学習を進め、教師は異学年同時に学習の状況を見守りながら必要な支援や助言をする見守り支援型リーダー学習をめざしている。児童が主体的に学習に取り組み、考え方をさらに深めることができるよう、教師は個や集団の状況を見取り、児童の学習状況に応じて柔軟かつ臨機応変に直接指導や間接指導を行う。このめざす授業の姿を全校で共通理解し、低学年から発達段階に応じて、自分たちで学習を進めることができるような学習力を育てていく。本校の実態にあった見守り支援型のリーダー学習は「主体的・対話的で深い学び」の実現につながると考える。

（3）　ICT 活用の視点から

本年度より全校児童に一人一台タブレット端末が導入された。本校は昨年度よりコロナ禍の中、ICT の活用について研修を進めてきた。理科や生活科での動植物の観察の記録や算数科での図形操作、互いの考えの交流、発表と様々な活用に取り組んできた。これらのことより、本校のめざす見守り支援型のリーダー学習においても、児童が主体的に学びを進めるために ICT を効果的に活用したい。

2　研究内容

（1）本校の実態に応じた複式指導、「見守り型支援」の充実

○　学習リーダーとフォロアーの育成

○　学年に応じた学習ガイドの活用　　○　教師の支援

（2）ICT の効果的な活用

○　導入の場面での活用　　○　考えや意見の交流

○　学習の記録・蓄積　　○　可視化

3　研究の実際

（1）本時案

【3学年】あまりのあるわり算（第二次　1／2時）	【4学年】割合（第二次1／2時）
(1)主眼　全員座るために必要な椅子の数を考える活動を通して、余りを切り上げて処理する場面を理解することができる。	（1）主眼　関係図を基に建物の高さを求める活動を通して、建物の高さが何倍になるかに着目してまとめて解く方法があることがわかる。
（2）準備物　大型テレビ　タブレット　ワークシート	（2）準備物　プロジェクター　タブレット　テープ図　ワークシート

（3）展開　（形態について　色つき・・・直接指導　色無し・・・間接指導　斜線・・・見守り型支援）

教師の働きかけ	予想される児童の反応	学習活動・内容	形態	学習活動・内容	予想される児童の反応	教師の働きかけ
・分かっていること、求めることを確認する。 ・今までの問題との違いを確認する。	・１人残りそうだな。 ・今までと違ってあまりを求める問題ではないな。	1　問題１を読んで題意をつかみ、式を立てる。		1　問題文を読み、課題をつかむ。	・３つの建物を比べるんだな。 ・百貨店の高さはすぐに求められそうだな。	・分かっていること、求めることを確認する。 ・今までの問題との違いを確認する。
あまりをどうすればいいか考えよう。				学校の高さの求め方を考えよう。		
・子どもを実際に椅子に座らせて、全員が座るには何脚必要なのか体感できるようにする。（ア） ☆ロイロノートのカード上でブロック操作を行い、余りの処理をどうすればよいか発表に生かす。（イ） ☆題意をつかむことが難しい児童には、必要に応じてロイロノートでヒントカードを送り、操作活動をさせる。	・残った人はどうしたらいいのかな。 ・実際に座ったらもう１つ椅子が必要だな。 ・残り３人だから、もう１脚必要だ。 ・『みんなすわるには』とあるから、もう１脚必要だ。 ・どういうことかわからないな。 ・『全部運ぶには』と書いてあるから、さっきと同じようにできるかな。	2　あまりの数をどうするか考える。 3　問題２を読み、問題１と同じように考え、話し合う。 4　練習問題に取り組む。		2　３つの建物の数量関係を整理する。 3　学校の高さの求め方を考える。 ・順に戻して解く方法 ・まとめて何倍になるかを考えて解く方法 5　テープ図をもとにまとめて考える方法を確かめる。	・「百貨店の高さの３倍」だから、テレビ塔は一番右かな。 ・「百貨店は学校の２倍」だ。 ・関係図に表したら分かりやすいな。 ・百貨店の高さから求めてみよう。 ・学校のいくつ分がテレビ塔になるかな。 ・求め方は２通りあるんだな。 ・学校の６つ分がテレビ塔の高さになっているな。	☆ロイロノート上で建物の数量関係について操作することで試行錯誤しながら考えることができるようにする。（ア） ☆ワークシートに書いた式や関係図をロイロノートで、共有することにより、友達と考えを比較できるようにする。（イ） ・ペアで関係図と式を対応させて説明できるようにする。 ・テープ図を利用して学校のいくつ分がテレビ塔になるか分かるようにする。
・「あまった数」という言葉を使って、振り返りを書くようにする。	・あまった数の意味を考えて、答えを１増やすことがあることが分かりました。	5　本時の振り返りを行う。		6　本時の振り返りを行う。	・まとめて何倍になるか求めても解けることが分かりました。	・「まとめて」という言葉を使って、振り返りを書くようにする。

（4）評価	（4）評価
ア　余りの処理をどうしたらよいか話し合おうとしている。態(行動観察) イ　余りを切り上げて処理すればよいわけを考えたり、説明したりしている。 思（発言・ノート・タブレット）	ア　数量関係を正しく関係図に整理している。知・技(発言・タブレット) イ　「順に戻して解く方法」と「まとめて何倍になるかを考えて解く方法」の２つの方法で考えている。思（ノート・タブレット）

（２）研究協議

○　３年生は題意をつかませるために、実際に椅子に座る体験をさせた。学力差の大きい学年なので手立てとして大変有効であった。「ロイロノート上のドット図は人である」と理解できない児童がいた。具体物と反具体物が結びついていない。

○　３年生の問題文は、あまりの数を調整したことで考えやすくなった。

○　式の数字が何を意味しているのかを説明させるとよい。

○　４年生は学習リーダーが育ちつつある。リーダーカードを見て自分たちで学習を進めようとしていた。

○　導入時に復習をすることで同じ土俵にたてる。

○　複式のリーダー学習においては、互いに話を聞き合うことがとても大切である。

○　両学年とも思考力をともなう大変難しい内容であったが、チャレンジしていたことがすばらしい。通常の授業では、「ずらし」や指導計画の工夫など、無理のない組み合わせをするとよい。

（３）受指導

指導者　光市立浅江小学校　教頭　中谷　晴彦　様

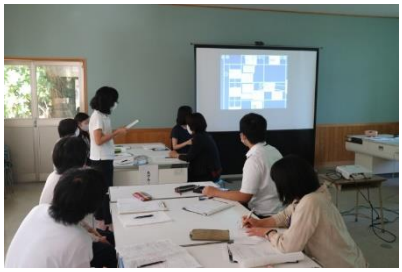
○　子どもが語り、教師が補う複式授業をめざしてほしい。できる限り自分たちの力で授業を進める子どもたちを教師は見守り、教師は必要に応じて子どもに問いかけ考えを引き出す役割を担う。

○　全員参加を促す課題や発問が大切である。そのために体験や ICT を活用するとよい。

○　しっかりと対話活動をさせるために、考えを可視化するとよい。ロイロノートは有効な手立ての一つである。

○　着地を促す振り返りの手立てとして、キーワードを活用するとよい。言語化することによって子どもたちが学びを確認することができる。教師がキーワードを明確に決め、授業の中で子どもが認識できるような展開にするとよい。

○　複式学級は異学年が学ぶ場であるので、導入部や終末部に共通の学習場面を取り入れるとそのよさを生かすことができる。



４　今後の課題

複式授業において、見守り支援型のリーダー学習を成立させるために、全校体制で段階的に計画的に時間をかけて学習力を育てていく必要があることを実感している。また、学力差が大きい学年もある中で、全員参加を促すことのできる課題や発問の設定、リーダーやフォロアーの育成、教師の支援の仕方などについて、さらに研修を深めていきたい。また、ICT については、アナログとのバランスの中で今後も効果的な活用に取り組んでいきたい。